The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「神様」の英訳から見た、現代日本人の宗教観 ：「共通基盤」から日本事象を説明する試み
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪外国語大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2007, 5, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11680
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「神様」の英訳から見た、現代日本人の宗教観
—「共通基盤」から日本事象を説明する試み—

小倉　慶郎

【要旨】

日→英翻訳の授業では、技術的なことだけを教えるわけではない。言語の裏には、膨大な文化的背景が広がっており、その理解無しでは適切な翻訳ができない場合がある。そのため翻訳の授業でも、必要に応じて日本事象の説明に時間を割くことがある。そしてその説明をしているうちに、留学生から不満・失笑が出るパターンがいくつかあることに気がついた。中でも、「自国にはほとんど無い日本事象」を理解してもらうには、「共通基盤」に立った説明を試みると効果的であることがわかった。その実践例として、「神様」の英訳に際して、現代日本人の宗教観を説明した取り組みを紹介する。キリスト教、仏教、神道の区別無く都合よく利用する日本人の姿勢は、外国人には理解困難であるばかりでなく、時として嘲笑の対象となる。しかし日本文化と西洋文化の共通点を指摘し、それから双方の違いを説明することによって、日本人の宗教観も十分に納得してもらえると筆者は考えている。

はじめに

私が本センターで、外国人留学生を対象に日→英翻訳（「日英翻訳者になるための実践コース Practical Translation（J to E）」）を教えはじめたのは2002年のことだ。世界のさまざまな国から来る留学生を相手にした授業は、日本人だけの授業では起こり得ない驚き、喜びに満ちている。しかし同時に新たな困難にも直面する。日本人に翻訳を教える際は、技術的なことが主となり、その背景となる文化の相違を教える必要性はあまり感じない。暗記中心の受験教育や、西洋文化にコンプレックスをもつ日本人の心的傾向のせいかもしれないが、日本人学生には「日本は～で、西洋は（あるいは他の多くの国々は）～だ」といえば、特に疑問を持たずに納得（あるいは鵜呑みに）してくれることが多い。これは翻訳の授業だけでなく、日本の学校（大学を含む）の授業の一般的な傾向だろう。

しかし、本センターの留学生にこの日本式の「一方通行授業」をしようとしてもうまくいかないことがある。日本語・英語とも上級レベルの優秀な学生が揃い、質問を自由にしてよいと、教師から開放的姿勢を示した授業では、質問が次々に飛んでくる。そして教師の側は答えに窮することも少なくない。

以下は実際に教室で交わされた質疑応答だ。

教　　師：青りんごは、英語ではgreen appleだ。日本語では、緑色のことをよく「青」と表現することがあるね。「山が青々として」などはよく使う表現だ。本当に山がブルーというわけではない。あくまで色はグリーンだ。

留学生１：ではどういうときに、青といい、どういうときに緑と使い分けるんですか？

教　　師：…。

留学生２：（教師に代わり助け舟として回答する）みずみずしい緑のときは「青」ということが多いんじゃないかな。それにしても、僕がインドで「青りんご」と習ったときは、

いったいどんなりんごだと思いましたよ（学生一同笑）。ところで先生、山が遠くに霞んで見えるとき、緑ではなく本当に青く見えるときがありますよね。そういうときに、日本語ではなんと表現するんですか？

教　　師：（しばらく沈黙してから）日本語の書き言葉なら、「蒼い」という漢字があてられるから、「蒼い山」という表記を使う人もいるね…。

とっさに、「蒼い」という言葉が思い浮かび、漢字の使い分けに逃げた私だが、学生の質問にきちんと答えられたかどうか自信はない。本稿をお読みの先生方は、留学生のこの質問にどのように答えるのが適当だとお考えになるだろうか。

1. 留学生が理解しにくい日本事象の説明とは？

私の日→英翻訳の授業では、必ずしも技術的なことばかりを教えているわけではない。必要に迫られて日本事象を説明することがある。言葉の背景には、その言葉を支える文化・歴史が果てしなく広がっており、その説明無しには適切な翻訳が困難になることがあるからだ。こうして、時折日本文化の背景を簡潔に説明しながら、翻訳の授業を進めているうちに（私は通訳の授業も担当しているので、通訳の授業でも背景知識を解説することがあるが）、あることに気がついた。それを聞いた留学生が戸惑ったり、反論が出たり、あるいは失笑を買う場合があるのだ。授業で使用するテキストの説明も含めて、留学生がどのような場合に不満を示すのかをまず見ていきたい。

よく、外国人向けの日本案内などに「日本は四季の区別がはっきりしている」と書かれていることがある。実は、この意味が明白ではないのである。「区別がはっきりして」というのは、1年のうちいつの時期であっても、春、夏、秋、冬と区別できるという意味だろうか？もしもその意味であれば、後述するように事実誤認の可能性がある。それとも、春は桜、秋は紅葉というように、それぞれの季節を代表する風物がはっきりと決まっている、という意味だろうか？もしもそうであれば、言葉の使い方に問題があるかもしれない。

一般の日本人の中には、「日本だけに四季がある」と誤解している人もいるようだ。いまでも新聞、雑誌、書籍などのメディアで、外国人から指摘されることがあるのはご存知であろう。どの国、地域にも四季はあるから、間違いは明白である。公式の場やテキストでこのような説明に出合うことはまず無い。しかし「日本は四季の区別がはっきりしている」となると別だ。これを日本の独自性のように説明する日本人や文章はいろいろなところでお目にかかる。たとえば、私が以前通訳案内業試験（英語）を受験するときに、テキストとして『日本―その姿と心―』（学生社、第3版）を使ったが、いまこの本を開くと日英の対訳で次のように説明されている。

しかし、大部分の地域は海洋性の温暖な気候で、四季の区別がはっきりしている。
Most of Japan does, however, enjoy a temperate, oceanic type of climate with four distinct seasons. (pp.32-3)

日本の大部分は「海洋性の温暖な気候」であることに異議は無い。だが、「四季の区別がはっ

きりしている」という表現には最近疑問を持つようになった。というのも、授業で出てくる、「日本は四季の区別がはっきりしている」というフレーズに、留学生が抵抗を示すことがあるからだ。以下はロシア・ウクライナ・ポーランドなど北方の国出身の学生から、何度も指摘されている会話を再現したものだ。

留学生１：日本には、冬が無いですね。
教　　師：冬がないって？いまは、日本は冬だよ。
留学生２：日本は、冬が無くて、秋が延々と続いている感じです。日本には、春・夏・秋の３つしか季節がないと思います。
教　　師：どうして？
留学生１：日本では雪が降らないからです。
教　　師：つまり雪が降らないと君たちは、冬と感じないわけだね。
留学生２：その通りです。日本は、冬になっても雪が降らなくて、しかも秋のような中途半端な寒さが続くので、もっとはっきりしてほしいくらいです。
教　　師：なるほど、大阪はめったに雪が降らないかもしれないが、北陸・東北・北海道へ行けば冬は雪が降るよ。
留学生１：でも、少なくとも関西には「四季の区別がはっきりしている」という表現は当てはまりませんね。

もしもロシア、中央ヨーロッパ、北欧、その他寒冷地に住む人たちが冬の訪れを雪と結び付けているのなら、「日本は、はっきりとした四季もつ」というフレーズに、世界のかなり多くの人たちが納得できないことになる。何度も指摘され、留学生たちと話し合った結果から感じていることは、これは日本事象を説明する表現としては適切ではない、ということだ。この表現は、もともと「日本だけに四季がある」という誤解から発している可能性がある。日本人が四季と文化を誇りにすることから生じたと思われる「日本だけに四季がある」という表現は100％間違いとわかるから、「日本は四季の区別がはっきりしている」と形を変えたのかもしれない。というのも後者の表現は、長く日本に住んでみないと容易に反論できないからだ。

確かに、日本には四季に根ざした行事は多い。文学では、日本独自の俳句の「季語」について解説すれば、日本人がいかに四季に密着した文化をもっているかを外国人に説明し納得してもらうことは可能だろう。だが、それならば「日本文化は四季と密着して」とか、もっと具体的に、「日本には四季に密着した年中行事が数多くあり、それを大切にしている」と言葉を変えて説明すべきであろう。

次の例を挙げよう。これは留学生の例ではないが、外国人が理解に苦しむ典型的なパターンの一つと思えるものだ。

数年前のこと。某大学の講師控え室で、知り合いのＡ氏が怒っていた。彼は日本人女性と結婚し、日本（京都）に30年以上住んでいるイギリス人だ。彼の言い分をよく聞いてみると、その不満は次のようなものだった――日本人は「本音」「建前」は日本しかないように言う。でも、イギリスにだってあるし、どこの国にだってある。日本人は何でこんなことを日本の独自性のようにいうのだろう。おかしいではないか。

当時の私は、なんと説明してよいかわからず、ただ黙って彼の怒りの聞き役に回るしかなかった。

私の知る限りでは、たしかに英語には、日本語の本音、建前に対する「定型表現」は無い。しかしどの外国人にも、いや人間ならば本音と建前はあると考えていい。ただ、日本の場合は、「本音」と「建前」という定型の表現が日常使われていることから分かる通り、他国よりも使用頻度が高い、あるいは他国とは違うシチュエーションでも使われることがある。もしもそうならば、本音と建前を日本人の専売特許のようにいうのは誤りではないだろうか？たとえば、外国人留学生に「本音」と「建前」を説明するのなら、このようにしてみたらどうだろう。

皆さんの国にも本音と建前はあるでしょう。ですが日本人は本音と建前を使い分ける頻度が高いと思います。それは日本が島国であること、また日本人が農耕民族であるために人口の移動が少なかったことと関係しているのかもしれません。この本音と建前の使い分けは、日本の中でも関東よりも関西のほうが使用頻度が高いように思います。私は東京の出身で、30歳まで関東にいました。そして関西にはじめて来た時は、直接に相手にモノをいわずに間接的にやんわりという言い回しが、（私が生まれ育った）関東よりも関西でかなり発達しているなあ、と感じたものです。みなさんも聞いたことがあるかもしれませんが、京都で「ぶぶ漬けでもどうどす？」といったら「もう帰ってください」という意味です。実際に「ぶぶ漬け」という言い回しを使うどうかはともかく、このような間接的言い回しは、いまだに京都市内では使われているようです。大阪人は、京都人と比べて本音で話すといいいますが、僕が東京からはじめて大阪に来たときに公認会計士の先生からこういう風に聞いたことがあります。「もしも、大阪商人がボチボチです、といったら、それはかなり儲かっている、という意味。字句どおりに解釈してはいけませんよ」。

これは、私が授業中に時折学生に話す説明の一例だ。話の細部に異論を唱える人もいるかもしれないが、外国人を説得するという観点からすると、この説明は効果がある。今考えると、もしもあの時、イギリス人の先生にこんな風に説明していたのなら、怒りが納まったかもしれないと思う。結局、彼は、他国にもあるものを日本独自のものと自慢されるのが気に食わなかったのだろう。独自性の強調に対する、外国人からの不満は「本音」「建前」に限らずいろいろなところで聞くことがある。

最後に、留学生から失笑を買う日本事象の説明の例を挙げよう。

通訳・翻訳の授業では、どうしても日本語の謙遜表現について触れないわけにはいかない。通訳の現場であれば、スピーカーがその分野の権威であっても、講演の冒頭で謙遜して「つまらないお話しかできませんが」などとへりくだることはよくあるからだ。英語にも謙遜表現は存在する。しかし、日本語の謙遜表現はあらゆるシチュエーションで使われ、しかも英語に直訳するといかにも奇妙に響く。たとえば授業では、「何もございませんが」「拙訳」「弊社」「愚妻」「愚息」などを英語に直訳してみせる。There is nothing (on the table),my bad translation, our bad company, my stupid wife, my stupid son, etc.留学生からは笑いが沸く。でもなぜ笑うのだろうか？インド・ヨーロッパ言語は日本語に比べて謙遜表現が少ないから、上記のような表現を聞くことがないからだろう。つまり自文化には全くない表現であり、しかも

自文化から見て奇妙に思える表現は、彼らの失笑を誘う。こうした日本語の謙遜表現については、私はいまのところ次のような説明をすることが多い。

英語は、日本語に比べると相手を褒めたり、感謝したりする表現が発達していると私は感じています。英語にも、謙遜表現に相当するような、It is my pleasure....I am honored...という言い回しもありますが、「私はうれしい」「私は名誉だ」といって、結局は相手に感謝する表現になっていることに注意しましょう。このように英語は、相手を褒めたり、感謝したりして相手を高めるという表現が多いようです。一方日本語の謙遜表現は、自分を卑下し低くしますが、効果から見ると、自分を下げることは結局相手を高めているのと同じでしょう？英語は相手を高め、日本語では自分を低くする。両言語で表現の仕方は違いますが、結局どちらも、目的は同じと考えてはどうでしょうか？

日英対照言語学の門外漢である私には、これが言語学的に妥当な説明であるかどうかは、わからない。しかし留学生がひとりしきり謙遜表現の英訳に笑ったあとこのような説明をすると、彼らの顔つきが変わる。「なるほど」と納得した表情に変わるのである。

日本語の「謙遜表現」についてはいずれ別論文にまとめたいと考えているので、これ以上深入りはしないが、このように両文化間の共通項を引き出すのが、本稿で私が提唱する「共通基盤」に立った説明である。他国に無い日本的事象を説明するとき、相手の文化にも形は違っても同じもの（似たもの）があるよ、と説明すると留学生を説得しやすいのだ。これは、私の授業における試行錯誤から出てきたいまのところの結論である。

以上のように日本事象の説明をする際、外国人（留学生）から不満が出たり、彼らの失笑を買うケースがある。最近はツボを心得て説明するから、不満は少ない。それでも体験上、留学生から不満が出たパターンは、大きく以下の３つに分けることができよう。

1.「事実誤認にもとづく（可能性が高い）説明」（日本の四季の例）
2.「程度の差を、日本独自のものとして強調しすぎる説明」（本音と建前の例）
3.「自国にはほとんど無い事象であるため、理解されにくい説明」（日本語の謙遜表現の例）

次章では、３の例として日本人の宗教観を取り上げることにする。日→英翻訳の授業で「神様」を英訳する際に、筆者は日本人の宗教観を説明する必要に迫られた。そして試行錯誤の末、「共通基盤」に立った解説を試みた。

２.「神様」の英訳から、日本人の宗教観を説明する

いままで筆者を悩ませてきた、日本語・日本事象はいくつもある。そのひとつが「神様」の英訳であり、日本人の宗教観である。たとえば、日本人の大半は、無宗教であるという人もいるが、いや、神道、仏教、キリスト教などの信者（信仰者）の数を合計したら、日本の人口をはるかにオーバーするという統計もある。日本人の大多数は、正月に神社に初詣に行き、結婚式はキリスト教式を好み、葬式は仏式で行う。この日本人の実態を留学生に話すと、教室からクスクスと笑い声が聞こえることが多い。これは、前章で考察したパターンに分類すると、３番目の「自国にはほとんど無い事象であるため、理解されにくい説明」にあたるだろう。では留学生にどのように説明したらこの日本人の態度を納得してもらえるのか？私の知る限りでは、

世界には、神様や仏様に願いをかける無信仰者（atheist）はいないし、仏教徒なのにキリスト教の神に祈ったり、神社にお参りする国民はいない。筋道だった説明をしないで「日本人はそうなんだよ」と言っても心から納得してはもらえない。その場で笑われるか、あるいは陰で笑われるだけだ。

ではこれから、筆者の実践例を紹介したい。神様の英訳を検討しながら、「共通基盤」に立った日本人の宗教観の説明を試みることにする。

現代日本人の「神様」を説明するのに、折口民俗学を挙げたり、古代日本人の宗教観を引き合いに出すのは適切ではないだろう。学問的にどうかということではなく、何よりも現代人の実感にそぐわないからだ。現代人の実感に即した解説を試みるために、まず現在よく使用されている一般的な辞書の定義を足がかりとしたい。広く流布している辞書ならば、定義を現代人の実感に合わせる努力を絶えずしていると考えるからだ。

『現代国語例解辞典』（小学館）では、「神」を次のように説明している。

宗教的、民族的信仰の対象となるものの総称。世に禍福を降し、人に加護や罰を与える霊威。また死語に神社などにまつられた霊や、人為を超えて人間に危害を及ぼす恐ろしいもの。

もしもこれが現代日本人の神様観であるとするのなら、欧米（キリスト教文化）では神をどう見ているのだろう。同じ辞書には次のような補足説明がある、

キリスト教では、宇宙と人間の創造主である絶対者をいう。

これは英語でいうGodのことだろう。次に英語の辞書(Oxford Dictionary of English, Second edition、以下ODEと表記)でGodを調べてみよう。

God: (in Christianity and other monotheistic religions) the creator and ruler of the universe and source of all moral authority; the supreme being.
（キリスト教などの一神教で）宇宙の創造者、支配者。すべての道徳的権威の源。究極の存在。

日本の神様とは違い、キリスト教のGodは、宇宙を創り、宇宙を支配し、道徳的規律を及ぼすはるかに強力で大きな存在のようだ。ここで注意したいのは、不可算名詞のGodは漠然とした絶対者であるが、可算名詞として扱うと全く違うものになることだ。

たとえば、英語のlightを不可算名詞で使うと、「光」「光線」と捉えどころなく、形の無いものを意味する。だが、可算名詞として使うと、たちまち形のある具体的なものに豹変する。次の例文を見てみよう。“There is light at the end of the tunnel.”「トンネルの向こうに光が見える」のlightは漠然とした「光」「明かり」だが、“It's *a* light hanging from the ceiling.”なら「天井からぶら下がっている電灯」と、lightが姿のはっきりした「電灯」に変わる。それと同じように、Godがa god, godsと可算名詞に変わると、姿のある具体的な神様に変わる。可算名詞godのODEの定義を見てみよう。

god: a superhuman being or spirit worshipped as having power over nature or human fortunes; a deity.
自然や人間の運命に影響を与えるものとして崇拝されている、人間を超えた存在、精霊。deityと同義。

絶対者としてのGodよりも少し格下げになった感じである。そして定義を見る限りでは、日本語の「神」に近い存在のようだ。そしてgodsという語をEnglish-speaking peopleが聞いた場合、彼らがキリスト教徒であれば、エジプトの神々、ギリシアの神々、ヒンズー教の神々など姿を持った「異教の神々」を想起するのが普通のようだ。試しにGoogle（検索エンジン）のイメージでgodsを検索してみる。すると人間の姿をしたギリシアの神々、またゾウの姿や、人間の姿だが手が数本あるヒンズー教の神々の画像がヒットする。[1)]

以上のことから、日本の神様とは、多神教の神であり、英語ではa god, godsと表現される可能性が高いと推測できる。
では、実際に授業で使用した神様の訳例を参考に、この仮定が正しいかどうかを見ていきたい。

まず、『日本まるごと事典』（講談社インタナーナショナル）から。年中行事の「お正月飾り」は次のように説明されている。

①お正月の飾りは神様を迎えるためのもので、あしらうものは縁起のよいものである。(p.20)
New Year's decorations are made to welcome in the gods at the beginning of the year. They consist of propitious decorations.

お正月の神様とは、正確には「年神（歳神）」を指すようだ。インターネットの百科事典Wikepediaによれば、「年神」とは稲作の神様であり、その年の豊作をもたらす神であるという。一方、地方によっては祖先の霊が年神となることもあるという。では年神とはどのような姿なのだろうか？「暦には女神の姿をした歳徳神（年神）が描かれているが、神話に出てくる大年神は男神であり、翁の姿をしているともされる。元々民間信仰の神であり、その姿は様々に考えられていた」(Wikepedia)。人間の姿をしている神様であれば、英訳のようにgodsと表記するのは適当であろう。

ちなみにお正月といえば、私たちは「七福神」を想起することが多いが、同辞典では次のように説明されている。

②七福神は福をもたらす7人の神である。(P.186)
Shichifukujin are the seven deities that bring good fortune.

ODEでも定義されていたように、deitiesはgodsとしても同じである。七福神とはご存知の通り、恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁才天、福禄寿、寿老人、布袋の七人の神であり、その姿はおなじみである。これもgodsあるいはdeitiesという英訳が妥当であろう。

では、日本の神様はすべてgods(or deities)と訳せばいいのだろうか。日本は多神教（polytheism）の国だから、神様はすべてgodsなのだろうか？ところが、事はそう簡単にはいかない

ようだ。

留学生の中でも、女性に人気が高い日本文学作品に吉本ばななの『キッチン』がある。その中に収められた「ムーンライト・シャドウ」では、主人公の女の子が、最愛の恋人、等を亡くしてこう叫ぶ。

③神様のバカヤロウ。私は、私は等を死ぬほど愛していました。(新潮文庫p.147)
The *gods are assholes!* I loved Hitoshi—I loved Hitoshi more than life itself.

英訳者のMegan Backusは、舞台が多神教の国日本だからと、機械的にgodsとしたようだ。しかし、この訳語に対して2005年度秋学期の優秀な受講生たちの大半が異議を唱えた。godsではなく、Godにするべきだというのだ。その理由としては、(1) 英語としてはこのシチュエーションでは、Godとするのが自然だということ (2) godsとしては姿形のある多神教の神々(人によってはギリシア神など)を思い浮かべるが、それらはあくまで異教の神々である。つまり自分たちとは関係が薄い神々であるため、主人公に共感できず感動が薄れてしまう、などであった。私も、ここでは godsではなくGodがよいと思う。なぜなら、日本人の神様の概念には、姿も形も無く、宇宙を支配し動かしているGodの働きの一部が含まれていると考えられるからだ。

作家田辺聖子の『人生は、だましだまし』では、作者は「神様」(神サン)を次のように表現している。

…私はいつも〈運命〉にかたちを与えたくなるクセがあり、これを〈神サン〉とよぶ。私は〈神サン〉についてこれまで小説やエッセーでしばしば書いたから、読者のお目にふれることもあったかと思うが、〈神サン〉は〈運命〉そのものであり〈超越者〉という気分も含む。とにかく人間の手向かいできない存在。(p.39)

これは、日本人が「神様」と叫んだり、思わず語りかけるときの「神様」に近いだろう。キリスト教神のように宇宙の創造神とまではいかず、道徳を押し付けたり、人間を厳しく律するわけではない。姿形も見えない。しかし「運命」と言い換えられるような存在で、人智を超越した働きをする。

個人的な経験も少し話させてもらおう。

最近、就職活動をしている日本人学生から相談のEメールをもらった。その文面には大体次のような意味のことが書いてあった。「別に第一志望ではなく、何気なく受けた会社で内定をもらいました。そのあとはどこの会社を受けても落ちてしまうんです。これは、最初の会社にしろということなんでしょうか」。この場合、彼女に「最初の会社にしろ」といっているのは、いったい誰(何)なのだろうか?

以前、神・仏を信じようとしない完全に無信仰・無宗教といってもいい大学時代の友人と東京上野の不忍池でボートに乗ったことがある。しばらく乗ったあと雨が降り始めた。すると彼はこう言った。「これはもう終わりにしろ、ということかな」。終わりにしろ、と言っているモノは一体何なのだろうか?どうも、これが田辺聖子のいう「神サン」のようなのだ。周囲を注

意深く観察すれば、こうした日本人の発言は至る所に観察できる。姿形は無く、複数いるわけでもないから godsではない。キリスト教のGodほど厳しくはないが、少なくとも人間の運命を握っている絶対的存在だ。これ以上の考察はここでは控えるが、英語のGodの属性の一部を、現代日本語の「神様」がもっていることは間違いない、と私は考えている。

したがって日本語の「神様」はgods(deities)と訳せることもあり、運命を司る超越的存在としてGodと訳せるときもある。ではこれでおしまいかというとそうではない。まだ別の英語に訳せる可能性があるのだ。次の例を見ていただきたい。宮崎駿のアニメ『千と千尋の神隠し』の冒頭の部分だ。新興住宅地の近くに、家の形をした小さな石の祠（ほこら）が多数あり、見捨てられたような状態で放置されている。それを見た千尋は、母親に質問する。

④千尋「あの家みたいの何？」
母「石のほこら。神様のおうちよ」
Chihiro: What are those stones? They look like little houses.
Mother: They are shrines. Some people think little spirits live there.

もちろん、ここで神様をgodsと訳すことも可能である。しかし、なぜ英訳ではlittle spiritsとしたのだろう。受講生の中にも、この神様をspiritsと訳したものがいた。いったいspiritとは何だろうか。ODEの定義を見てみよう。まず、第一義からだ。

The non-physical part of a person which is the seat of emotions and character; the soul
人間の肉体でない部分、ここには感情、性格などが宿っている。soulと同義。

つまり日本でいえば「魂」「霊」ということであるが、ここではぴったり当てはまらない。さらに見ていくとa supernatural being（超自然的な存在）という定義がある。肉体とは関係なく、「霊」だけで存在するものをいうのだろう。例文を見るとshrines to natural spirits「自然の精霊の祭壇」とある。これならぴったりだ。したがってlittle spiritsは「(自然の）精霊」と考えていいだろう。

西洋には、God以外にもspiritsという超自然的な存在がある。人間全体に大きな影響を及ぼさないような存在。住宅地近くの林の中に打ち捨てられている祠は、「精霊の住処」と考えるのが、英語圏の人間にはわかりやすいのであろう。こうして「神様」はgods, Godだけでなくspiritsまでも含むことになった。

人間に及ぼす影響力、力という点から見ると、God＞gods＞ spiritsと図式化できるだろう。だが、この３つのすべてを包含する日本人の「神様」はどのように説明したらいいのだろうか？外国人に納得してもらうためには、首尾一貫した説明を「共通基盤」に立って説明することが求められる。

私は、日本人の宗教観、「神様」の基盤は、祖霊崇拝、自然崇拝を含む原始的な宗教形態にあると思っている。最近では、自然崇拝をアニミズム（animism）と呼ぶ日本の論者も増えてきたようだ。アニミズムは『広辞苑』では次のように説明されている。

宗教の原初的な超自然観の一つ。自然界のあらゆる事物は、具体的な形象をもつと同時に、それぞれ固有の霊魂や精霊などの霊的存在を有するとみなし、諸現象はその意思や働きによるものと見なす信仰。

アニミズムという言葉は、E．タイラー（Edward Burnett Tylor, 1832-1917）が*Primitive Culture* (1871)において原始的宗教の特色を表すのに用いたのがはじめとされる。タイラーは、原始的な宗教が多神教へと発展し、やがて一神教が誕生したと主張した。この進化論的宗教観は、当時の白人（西洋）優位の主潮が色濃く反映されているようで、私は全面的に賛成はできない。だが、宗教の原初的な形態としてのアニミズムが世界各地の文化に存在するという考えはいまでも傾聴するに値すると思っている。実際、タイラーの*Primitive Culture*よりも100年近く前、イギリスの哲学者ヒューム（David Hume,1771-67）は*The Natural History of Religion*(1757)の冒頭で、次のように述べている。

It is a matter of fact incontestable that about 1700 years ago all mankind were polytheists.
約1700年以上前、人類はすべて多神教を信じていたのは議論の余地の無い事実だ。

「1700年以上前」というのは、キリスト教の誕生前ということであろう。イギリスの歴史家、アーノルド・トインビー（Arnold Joseph Toynbee,1889-1975）はキリスト教・仏教などを原始的宗教と区別して「高等宗教」(higher religions）と呼んだ。この呼称も進化論的価値観にもとづくと思われ抵抗を覚えるが、ここでは、「高等宗教」の存在する国々、キリスト教文化の根底にも、アニミズム（あるいは多神教文化）が存在するという事実が大切だと私は考えている。

西洋文化は原始的宗教を「高等宗教」が踏み潰す形で成立している、と私は考えている。西洋文化のあちこちには、「高等宗教」の下敷きになってあがくアニミズムがさまざまな形で噴出している。その証拠に、留学生たち（主にキリスト教国出身）に、次のように説明すると、肯定的な反応が返ってくる。

皆さんの国にもきっと自然信仰や祖先崇拝の名残が残っているはずです。たとえば、英語国では、自慢したあとknock on woodあるいはtouch woodといって木製品を触れる風習があります。この表現はキリスト教起源でしょうか？これは木の中には精霊が住んでおり、その精霊に頼んで、傲慢による悪運を招かないようにしているという解釈があります。[2)]有名なハロウィーンなども、キリスト教起源ではないことは間違いありません。ghostsやspiritsがやってくるケルト人のお祭りが起源のようです。皆さんの文化の中にも、そのようなものはありませんか？

こう問いかけると、たとえばロシア人からは、「ロシア正教の中にも祖先を礼拝するお祭りがありますが、それはキリスト教起源ではありませんね」などという答えが返ってくる。

こうして原始的な宗教とされる自然崇拝、祖霊崇拝は「高等宗教」の文化の中にも、目立た

ない形で残っていることを自ら認めるのだ。さらに私は話を続ける。

西洋文化の中にも、原始的宗教が基底にあることが分かってもらえたと思いますが、私は、日本という国は、西洋とは逆にアニミズムが上にあり、高等宗教を下に踏み潰している（=「日本化」している）珍しい国だと考えています。たとえば仏教は、本来戒律を大切にし、僧侶の妻帯・肉食を禁じているはずですが、長い日本化の過程で戒律が消えてしまい、祖先崇拝を中心とする「葬式仏教」になっています。キリスト教の日本化については、皆さんに説明するほどの知識はありませんが、皆さんの先輩のポーランド人で日本のキリスト教を研究し、その変容に驚いていた学生がいました。[3]原始的宗教を上位にもつ日本文化は、キリスト教の神であろうが仏様であろうが、日本の神様の一つと考えて取り入れてしまうことに何の抵抗も感じません。ですから、日本人は葬式は仏教、結婚式はキリスト教で行い、初詣は神社に行って何ら不思議に感じないのです。日本のアニミズムは、明治期になって本格的にはいってきたキリスト教のGodも、契約や厳しい戒律の無い日本的神様として取り入れてしまったのかもしれません。だから日本の神様は、spirits, gods(deities)と訳せるだけでなく、「運命」とほぼ同義の日本的なGodとも訳せるのではないでしょうか？[4] なお誤解しないでもらいたいのは、こうしたアニミズム的宗教と「高等宗教」とはどちらが上とか下とかの序列関係は無いということです。いわばコインの表と裏の関係にあると私は考えているのです。

終わりに

最新の宗教学、民俗学、文化人類学的研究から見たら、私の説明にはまだ欠点・誤解があるかもしれない。この実践例は、あくまで「試み」であり、明らかな誤りがあれば今後修正していく考えである。ただし、ここでは最新の学問的成果を問うことが目的ではないことは、もう一度確認しておきたい。学問的には（いまのところ）正確だが、留学生が納得しない説明ではなく、あくまでどのように説明すれば留学生に納得してもらえるかということに私の主眼はある。

日本の文化には、確かに他国の文化とかなり異質なもの、ユニークなものがあると感じることがしばしばある。しかし文化的なユニークさを強調しすぎると、私たちの中の国粋主義的な心を満足させることはできるが、外国人には理解しにくいものとなるようだ。ややもすると、彼らから煙たがられるのが事実であろう。たとえそれが日本独自なものに思えても、最初からその特殊性に目を向けるのでなく、まず共通項に目を向け、それから違いを説明する。そうすれば、全く違う文化をもつ留学生たちにも受け入れられやすい。ほとんど他国には見られないような日本的事象も、決して特殊なものではなく、自国文化にも共通要素があると指摘していくアプローチは、批判・不満が生じにくく、外国人を説得しやすいのである。

実際私が「共通基盤」に立った説明をするようになってからは、私の解説に、留学生はあまり不満を示さなくなった、というのが実感だ。

この拙い説明の仕方が、日本語・日本文化を教える方々の参考になるかどうか心もとないが、授業における実践例として紹介させたいただいた次第である。筆者の日→翻訳の授業が、この説明の仕方とともに、受講生の将来のcareerに少しでも役に立つことを願っている。[5]

注

1）私は、現代人のさまざまな考え、傾向を知るのに、Googleをはじめとする検索エンジンを利用するのが有効だと思っている。検索エンジンの使用は、世界中の英語サイトによる「アンケート調査」を実施するようなものと考えるからだ。たとえば、Googleでgodsと入れてイメージ検索をかけると、図1,2のような画像が上位にヒットする。

図1　ヒンズー教の神々
http://www.avikatz.net/books/hindu/the_gods.html

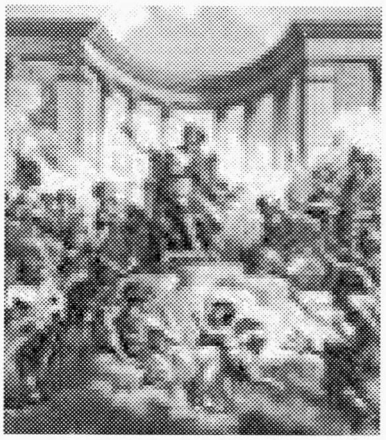

図2　ギリシアの神々
http://en.wikipedia.org/wiki/Twelve_Olympians

2）Collin's COBUILD Advanced Learner's English Dictionaryでは、touch woodの項目に以下のような注をつけている。

This expression may come from the ancient belief that good spirits lived in trees and people used to tap them to ask the spirits for help or protection. Alternatively, it may be related to the Christian practice of touching rosary or crucifix. People sometimes actually touch or knock on a wooden surface as they say this.

一方、knock on woodに関しては、大修館の『ジーニアス英和辞典』は以下のように説明している。

自慢などをした後で復讐の女神Nemesisのたたりを避けるため、通例木（の製品）をこぶしの内側でコツコツとたたきながら言うまじないの言葉。

3）キリスト教の日本化（土着化）を取り上げた包括的研究としては以下のものがある。
Mark R. Mullins(1998) *Christianity Made in Japan: A Study of Indigenous Movements*, University of Hawaii Press.
高崎恵訳(2005)『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』トランスビュー

4）これだけ意味の広がりを持った日本の「神様」は、英訳した場合、包括的な意味を伝えるのは難しい。したがって、ＮＨＫラジオ「英会話入門」2006年1月号のスキットで使われた以下の例文のように、*kami-sama*とそのまま日本語をローマ字表記にするのも一つの手である。

万理「あの若者たちが本当に信心深いとは思いませんね。ただ、入学試験となると、彼らの多くが神様に助けを求めるのよ」

Mari: I doubt that those young people are really religious. But when it comes to entrance exams, many of them turn to *kami-sama* for support.

ただし*kami-sama*の英語表記が一般的になるには、少なくとも英語圏に日本の「神様」が周知される必要があるだろう。

5）日→英翻訳を留学生に教える者として、受講生が母国に帰り、日本語から母国語への翻訳を出版したという知らせを聞くほどうれしいことはない。本稿を執筆中の2007年1月9日に、かつて大阪外大留学中に私のクラスを熱心に受講していた Diana Tihan（ルーマニア）からE-メールをもらった。現在ルーマニア外務省に勤務している彼女は、遠藤周作の『侍』のルーマニア語訳*Samuraiul*を2006年に出版したそうである（メールの趣旨は、いまルーマニアを訪問中の麻生太郎外務大臣に自分の翻訳を謹呈したいが、謹呈の際の言葉はどのようにしたらネイティブの日本人らしくなるのか、という問い合わせであったが)。彼女の翻訳・出版に私の授業が役に立ったかどうかはわからないが、日→英翻訳の授業の冒頭では、必ず次のような話をしていることを最後にお伝えしたい。

この授業は、日本語から英語への翻訳のみを扱います。皆さんの中には中国語、ベトナム語、ロシア語、ウクライナ語、ルーマニア語、ブルガリア語、ポーランド語などさまざまな言語を母語としている人たちがいます。残念ながら、私は2ヶ国語しかできないので、そうした皆さんの母国語への翻訳をお手伝いすることはできません。しかし、日→英の翻訳は日本では100年以上の歴史をもっており、それぞれのジャンルで確立された翻訳スタイルがあります。日→英の翻訳スタイル、プロ翻訳者の工夫を知ることは、皆さんが日本語を母国語へ訳す際にもきっと役に立つはずです。帰国後に、日本文学などを翻訳・出版する夢をもって、この授業を受けてもらいたいと思います。

（おぐら　よしろう　大阪府立大学助教授、本センター非常勤講師）